

和歌山県広川町の津波に対する防災対策

津波防止ゲート



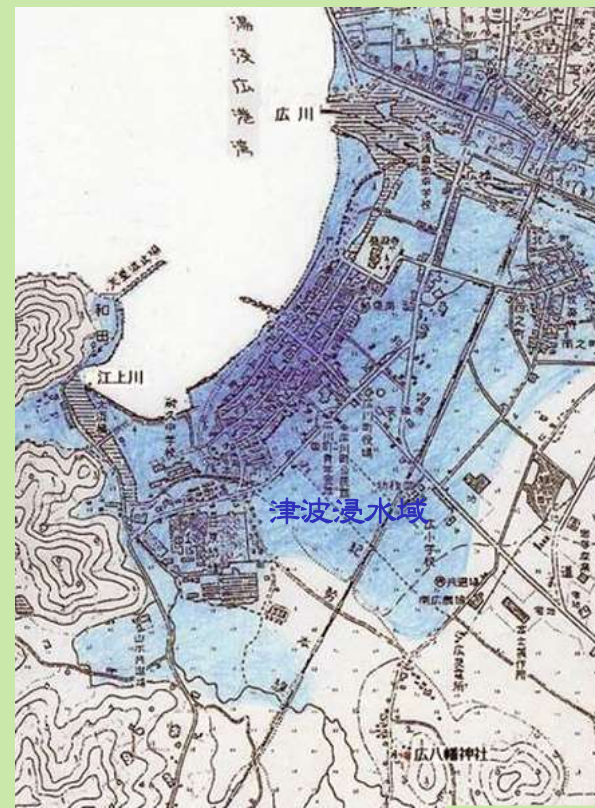
浜口梧陵の津波防止堤



津波防止ゲート



広川町の港湾地区 (著者撮影 2011. 3.)



←安政南海地震津波の浸水域

↓昭和南海地震津波の浸水域



津村による注意事項
二つの津波浸水域の図は、羽鳥ほか(1983)の調査結果を参考に、昭和40年代の地図に概略の範囲を描いたものである。地図は津波襲来時のものでも現在のものでもないことに注意されたい。

3. 11津波災害後に出版された高山文彦著『大津波を生きる 巨大防潮堤と田老百年のいとなみ(新潮社)』に注目！

高山文彦著『大津波を生きる－巨大防潮堤と田老百年のいとなみ』を読ませていただいた。月刊誌「新潮45」に『田老物語』として連載されていたものであるが、この単行本化により全体に目を通すことができ、著者の云わんとするところがよく理解できたように思われる。田老町を2011年9月に一度訪問しただけで(しかも駆け足で通り過ぎただけで)、普代村との比較において『津波に敗北した田老町と津波を克服した普代村』との判断をしてしまったことを大いに反省している。被災後の結果だけを見れば、被害が皆無に近い普代村と壊滅状態の田老町との差異は誰の目にも明らかであった。しかし、田老町の被災状況だけを見て“津波に敗北”したと思ったのは早計であった。この本は田老百年の歴史を紐解きながら、そのことを教えてくれたような気がしている。特に重要と思える点は、例えば以下のごとくである。

○非常に大きかったのは、昭和8年3月3日の三陸大津波で被災した時の田老村の村長、関口松太郎の存在であった。彼はまず迅速な救援を求めるために被害状況を即座に調査し、必要とされる救援項目を自らしるし、消防団員に持たせて宮古に向かわせている。救援活動が他地域と比べて効率よく行われたのは、このような努力によるものと思われる。

○関口村長は津波襲来の3日後の3月6日に開かれた村議会において、150戸分の仮設住宅と防潮堤の建設から成る復興(復旧ではなく)計画を提案している。すなわち、高台移転ではなく原地復興を基本方針として打ち出している。

○石黒英彦県知事の動きも迅速で、津波襲来から4日後には県庁内に復興事務局を立ち上げ、応急復旧およびその費用の算出と復興計画の作成を指示している。

○驚くべきことに、石黒知事は関口村長と共に、3月12日には東京に向かっている。そして、帝国議会の会期末まで10日しかないという切迫した状況下で、内務省と農林省の昭和8年度予算への海嘯災害予防調査費の追加を実現させている。

○さらに、後藤新平によって関東大震災後に設立された帝都復興院の技師経験者2人を連れ帰り田老村の職員として雇いあげている。これによって防潮堤と市街地計画を一体とした復興計画が実現している。土地台帳を基に各戸から2割の土地を無償で提供してもらい、道路拡幅に当てたり、防潮堤は津波を直に受け止めるのではなく、勢力を受け流すように計画するなど復興計画は帝都復興院での経験を反映したものであった。

○具体的な復興事業は地元漁業会の協力を得て、当初は村独自の事業として進められた。「船で稼げぬ間は、防浪堤築造で食いつなげ。復興に向かって汗を流すのだ。そこで稼いだ金で船が買えるじゃないか」と云うことのであった。「紀州広村で私財を叩いて防浪堤建設を進めた濱口梧陵の事蹟が思い描かれていたことだろう」と著者は述べているが、関口村長がそれを知っていたかどうかについては明らかにされていない。

○1960年のチリ地震津波の際には、この防潮堤が功を奏して田老ではひとりの犠牲者も出さず、建物の被害もなかった。さらに人びとは、まるで避難訓練の時のように整然と高台の避難場所にのぼり、やがて到来した津波を平然と見下ろしたそうである。後日、田老町が『津波防災の町宣言』を発するほど自信を持ったのも判らないではないが、どうもその辺りから津波に対する防災意識は下り坂に差し掛かったのではなかろうか。それにしても、今回の津波災害による惨事は、昭和の三陸津波から78年、チリ地震による津波から51年、いったい何が以前と変わったのであろうか？

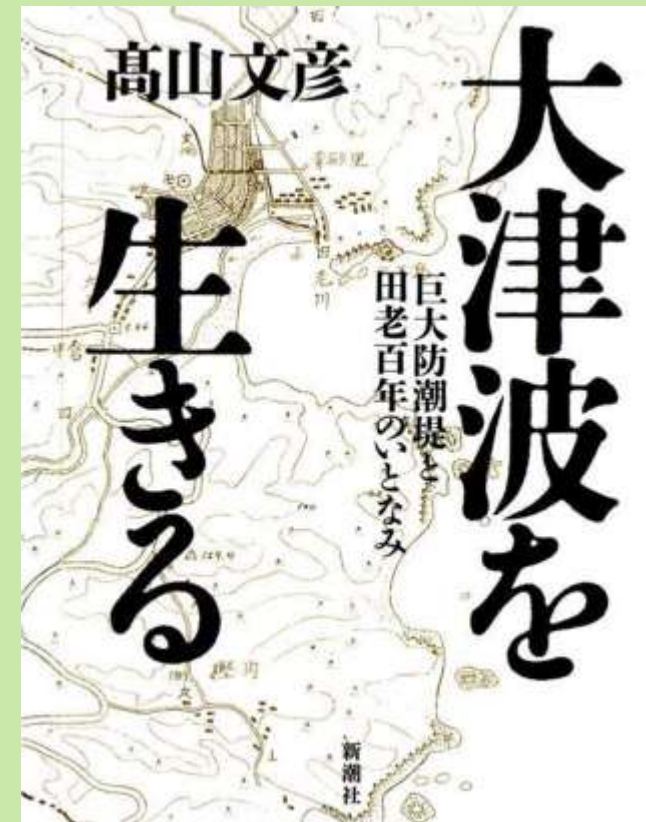
興味深い関連資料

今村明恒：講演 津波の話

笹間一夫：論説 防浪漁村計画

濱田稔ほか：論説 三陸津浪における家屋被害
(以上3編は建築雑誌 1933年6月号)

田中館秀三・山口彌一郎：三陸地方に於ける津浪に依る聚落移動、地理と経済 1巻3号, 1936.



高山文彦：大津波を生きる 巨大防潮堤と田老百年のいとなみ，新潮社，2012. 11. 30.